東北大学史料館 新公開資料速報展（第 12 回）

2012.1

－本川弘一関係史料－

ダイナマイトにも負けない学長

「人徳の中にユーモアがあった」（北 杜夫）

東北大学の歴史の中で、在職中に亡くなった学長（現在の総長）が二人います。その一人が、今回とりあげる本川弘一です。彼の人生は幼い頃から、試練の連続でした。

本川教授の専門は、医学の中の生理学です。東北大学に赴任して最初に扱ったのは、脳波の研究でした。現在では考えられないことですが、当時は研究の初期段階で、認知度も低く、中には「ぬらしたタオルに電極を刺しても電波は出る」といった発言もあったそうです。そんな中で、不屈の努力と抜群の語学力を駆使し、次々と重要な論文をまとめて、昭和 29 年（1954）に日本学士院賞を受賞するに至りました。しかしその一方、脳波研究を誤解した精神障害者が本川研究室にダイナマイトを仕掛ける事件が発生し、危うく難を逃れたこともありました。

本川教授の授業をうけた学生の一人に、後に芥川賞作家となった北杜夫（昨年 10 月逝去）がいました。彼の『どくとるマンボウ青春記』や当時書かれた日記には、敬愛すべき教授の筆頭として本川教授が登場し、「教だけでなく育もする先生」と記されています。今回展示する講演記録には、教育に関する本川教授の体験を記した記述も見られます。

本川教授は医学部長、新設された初代歯学部長を経て、昭和 45 年（1965）に学長になりました。前任の石津学長が、大学紛争のため辞任したあとをうけ、粘り強く学生と交渉したことが知られています。過労のためか、6 年後に病のため逝去しましたが、その粘り強い生き方と、絵画を愛した人柄の一端を是非ご覧下さい。

いずれも
本川画